

6) 進行性核上性麻痺の CT 診断: パーキンソン病との比較

結城 伸泰・佐藤 修三 (新潟大学脳研究所)
湯浅 龍彦・宮武 正 (神経内科)
伊藤 寿介 (新潟大学 歯科)
放射線科

進行性核上性麻痺 (PSP) はけっして稀な疾患ではない、また、画一定型的な臨床像を呈する例が多いと思われるが、多くの症例が積み重ねられるうちにその臨床像の多様性が知られるようになった。特に鑑別の必要となる疾患としてパーキンソン病が挙げられるが、典型的な症候の揃っていない発病初期の PSP との鑑別は困難である。

今回われわれは、剖検で確認された PSP 4 症例と臨床的にパーキンソン病の診断がついている15症例の CT を linear measurement によって定量化し、比較した。PSP 4 症例はいずれも発病初期あるいは非典型例でありながら、第3脳室の拡大、中脳水道へむかう脚間槽の拡大と中脳被蓋の萎縮が認められた。PSP の早期診断に対する CT の有用性が剖検例ではじめて証明された。今後、CT・MRI などの画像診断は PSP の補助診断法として非常に大きな役割を果たすであろう。

7) 結節性硬化症の CT 所見

丹野 芳範 (新潟大学脳研究所)
神経内科
長谷川 彰・倉島 昭彦 (同 脳神経外科)
岡本浩一郎・登木口 進 (新潟大学 歯科)
伊藤 寿介 (放射線科)

私達は、臨床的に結節性硬化症と診断された25例の頭部 CT 所見について検討をおこなった。

25例中、3例は正常所見であったが、22例に脳内石灰化像がみられ、そのうち3例に多発性の低吸収域像が認められた。

結節性硬化症における低吸収域像の存在については、従来あまり注目されていなかったが、最近の報告では、皮質と白質の境界部に好発すると言われている。

また、病理学的には demyelination が主体であると言われている。しかし、なぜ石灰化を伴わないのかについての明確な結論はでない。

長期観察中に石灰化を起し得るのか否かを含め、経時的な観察が必要と思われる。

25例中3例に脳腫瘍の発生をみた。発症部位は、Monro 孔付近の脳室壁上衣下に多く、いずれも閉塞性水頭症をおこし手術を行った。

そのうち1例の組織型は血管腫であり、かなり稀な例と考えられた。

8) 腹部総合画像診断における超伝導 MRI の使用経験報告

岸 裕・大野 隆史
大田 宏信・野本 実 (新潟大学第三内科)
上村 朝輝・市田 文弘
渋川 真・佐野 満
村上 義則・広川 陽一 (三之町病院)
貝津 徳男・山本 恒男

今回、三之町病院にて1.5T という高磁場 MRI を腹部画像診断に用いる機会を得たので典型的な疾患の MR 像を呈示し、その使用経験を報告する。主に CT との比較を行ったが、MR 独特の縦方向のセクション、血管系の明瞭な描出等は、CT をはるかにしのぎ、又、患者が充分静止を保てる場合にはその画像は、質、安定性共 CT にまさった。しかし、静止が充分でない場合は CT に劣る場合も見られ、この点が今後の技術的改良に期待される点である。結論として現時点では病変の発見という点では CT がややまさる場合が多いが、その質的診断という点では MR が CT をはるかに凌駕していると言える。

9) 超伝導型 MRI による高速シネモードイメージの使用経験

広川 陽一・貝津 徳男 (三之町病院内科)
渋川 真 (同 放射線科)

超伝導型 MRI 装置による高速シネモードイメージの使用経験を報告する。使用装置はシーメンス社製 Magnetom 1.5T (15,000ガウス) である。励起パルスを90°より小さくかけるグラディエントエコー法で Fast Low Angle Shot 法 (FLASH) とよばれる方法にて撮影する。本法によるとくり返し時間が 30msec 以下でも十分強い信号が得られる。対象者には心電図同期を行ない同一断面を1心拍13~16分割し、それらの像を合成する事によりシネモードを作成する。心臓を中心として実例を供覧する。心室の壁運動、心腔内血流信号については、心エコー:カラードプラー法が操作性の上ですぐれているが、心エコー記録困難例でも撮影でき、心臓全体の構造を把握できる点で MRI は優っている。また造影剤を一切使用せず血管、血流イメージを撮影できる事は画期的なものであり今後広く使用されると思われる。